

読者の声



死を受け入れられる 場づくりを学んだ

栗原 楓

山梨大学医学部看護学科 4 年

私

は山梨大学医学部看護学科の4年生で、昨年夏、本誌2016年1月号の「ケアのヒュッテ」に登場したどちペインクリニックにおいて、統合実習を経験したので報告します。

実習が行なわれた期間は、2015年7月22～31日です。

この統合実習は学生最後の実習で、自己の学習上の課題に対して、自分で実習目標と実習計画を立てるので、自分の興味のある施設に実習に行くことができました。

私はそれまでの実習経験から、意思の表出が難しい患者さんがその人らしく最期まで過ごすために、看護師はどのように関わっていったらよいのかを学びたいと思い、どちペインクリニックでの実習を希望しました。そして、実習を通して、意思の表出があまりない患者さんとの関わりの難しさをあらためて実感しました。

実習の間は毎日、どう関わっていけば患者さんがその人らしく過ごせ

るのか、安楽に過ごせるのか考えていました。また、毎日患者さんに声をかけたり、手足をマッサージしたりといった関わりを続けていくうちに、これをするすると患者さんの表情が少し柔らかくなる、これをするすると体を少し動かすといった小さな変化に気づくことができるようになりました。そして、その小さな変化から、患者さんはいまこう感じているのではないかと考えることができるようになりました。

どちペインクリニックのスタッフの方と一緒に開いた音楽会では、患者さんを病室から広場までベッドごと移動させ、ご家族、スタッフ、他の看護学生と一緒に患者さんの好きな曲を歌いました。患者さんとそのご家族の反応から、患者さんにご家族にとって素敵な時間を過ごしていただけたと感じました。

この実習のなかでいちばん印象的だったことは、患者さんが亡くなったときの患者さんの穏やかな表情とご家族の様子でした。ご家族は患者さんの死を受け入れられており、それができたのは、それまでの患者さんやご家族に対するどちペインクリニックのスタッフの親身な関わりがあったからだと感じました。

今回の実習では、患者さん自身が何をしてほしいかを訴えることができなかったため、私の行なっている



ことが患者さんのためになっているのかを悩みました。しかし、訴えることができないからこそ、患者さんにとって何が必要か、こちらが観察して考えることが大切なのではないかと思いました。

また、患者さんに対して行なおうと考えていたことが、時間がなくてできなかったことがありました。そのとき、私は「また明日だろう」と思ってしまいましたが、次の日に患者さんが亡くなりました。そのことから、またあとでやろうという考えではいけないということも学び、時間を有効に使い、その患者さんに必要なことはいま実施しなくてはいけないと学びました。

あなたの「声」を お待ちしております。

編集室
より

掲載記事に対する感想／著者への手紙／編集室への意見・提案／看護に対するエッセイ／取り上げてほしいテーマなど、何でもOK。読者同士の情報・意見交換の場にしたいと思います。

●投稿について

封書、ハガキ、FAX、メールにて下記までお送りください。実名掲載が基本となりますが、匿名の場合はその旨明記ください。掲載分には医学書院特製図書カードを進呈します。

●宛先

郵送の場合：〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23

医学書院「訪問看護と介護」編集室

FAXの場合：03-5804-0485 E-mailの場合：houmon@igaku-shoin.co.jp